

國學院大學學術情報リポジトリ

郁達夫『日記九種』試読：
「寒灰の再燃」をめぐって

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大久保, 洋子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000898

郁達夫『日記九種』試読

——「寒灰の再燃」をめぐって——

大久保 洋子

はじめに

中華民国期の作家郁達夫（一八九六—一九四五年）は、一九二三年一〇月、北京大学に統計学講師として赴任するため、それまで約二年間にわたり文学活動の拠点としていた上海を離れる。旺盛だった創作欲は、これを機に低迷する。二四年初頭に書いたと思われる郭沫若、成仿吾宛の書簡では、郁が文学そのものに対して疑問を抱くようになって心境が綴られている。

芸術のうち、人に嫌悪感を抱かせず、そこから直接悦びを得られるものは、ただ数枚の偉大な絵画や、数節の奔放な音楽だけで、そのほか、例えば詩や文、小説、戯曲、その他の一切の芸術作品は、すべてひどく

いやらしいと感じる。

僕は近頃、北京の友人たちとある決まりを新たに作った。僕と会う時には絶対に文学について話してくれないな、僕の数篇のくだらない作品のことは、なおのこと持ち出してくれるなというものだ。なぜならひとたび持ち出されれば、僕自身もつと恥ずかしくていゝたたまれなくなり、僕の苦しみは一層増すからだ。⁽¹⁾

郁がその後約三年にわたって小説を書けなくなる背景には、経済的苦難や教員生活への葛藤などの要因もあつた。⁽²⁾だが、そのような表層的な困難の奥には、郁自身のそれまでの文学に対する疑念があり、郁はその後の長い期間において、創作上の危機から脱却しようと模索を重ねていたと

いえよう。⁽⁵⁾

郁の北京での生活は一年ほど終わり、二五年初頭に武昌師範大学へ赴任する。さらに二六年には広東大学、中山大学と転任するが、状況を打開するには至らなかつた。中山大学での職を同年末に辞し、翌二七年には上海に出る。先行研究では、二七年を郁の創作における転換期と位置づけ、郁の創作活動をこの前後で区分する考え方が多勢である。⁽⁴⁾この間、特に武昌・広州時代の文学活動については、作品や資料が少ないことなどから、さほど研究が深まっていない。本稿では、一九二六年から二七年夏にかけての生活の記録である『日記九種』から、郁の「作風転換」について探つてみたい。

一 『日記九種』について—先行研究の評価と本研究の出発点

すでに述べたように、一九二四年に文学への懷疑を告白した郁達夫が作家としての再生を果たしたのは二七年と言われている。この内面の変化は、郁がこの年に書いた『達夫全集』第三卷『過去集』の序文「五六年來創作生活的回顧」でも自ら明らかにしている。

今、私はただ自分が「どのように小説と関係を持つたか」「どのように書き始めたか」、また「創作について、どのような考えを持っているか」などをざっと語つてみたい。⁽⁵⁾

「五六年來創作生活的回顧」は小説とのかかわりを幼少期から振り返つて語つた文章だが、ここに見る通り、郁にとつて「創作」とは、旧詩や散文、翻訳などではなく、小説を指すものであつたと考えられる。郁は続く部分で、この年に創作意欲が再燃してきたことを書いている。

この一年は多くの幻滅を感じ、多くの疑いを生じ、自分の創作力が永久に消え失せてしまふかのように思った。それから上海に戻つてしばらく暮らし、暇を見て以前住んでいたところを歩き回るうちに、懐旧や落魄の感情が再び私の創作意欲をかきたて、現在まで至つてゐる。その間には広州に南下したり、北京に戻つたりして慌ただしく旅をしており、腰を落ち着けて偉大なものを書いたことはなかつたが、自分で考えてみるに、これからまだ奮闘することができる、もう一度一九二三年当時の元気さを取り戻すことができるよう

に思う。⁽⁶⁾

二七年に起こったこの変化の原因については、二番目の妻である王映霞との恋愛の成就が指摘されている。郁はその恋愛の経緯を『日記九種』に綴って発表している。

『日記九種』は二七年九月一日、北新書局より出版された。二六年一月から二七年七月末までの九篇の日記からなっている。一篇がそれぞれ約一カ月間の生活を記録しているが、期間には長短の差があり、内容面からもある程度のみとまりに従って区切りをつけていたと考えられる。

『日記九種』は、郁が広州での教職を辞して上海に出た後、王と知り合つて恋に落ち、恋愛が成就するまでの記録である。ほかに、創造社出版部の不正会計問題の整理にあつたことや、読書記録、交友関係の記録などがあり、資料としても貴重なものといえよう。

『日記九種』の第一篇である「勞生日記」は、単行本に二カ月先立つ二七年七月一日、『創造月刊』第一卷第七期に発表された。郁はこれに先立ち、「日記文学」という論文を同年六月に発表している。この中で郁は「散文の中で最も簡便な形式は日記体で、次が書簡体である」と述べる。その理由は、「もし三人称で主人公の心理を描けば、

しばしば一人称に書き誤ることがあるし、なぜ作者がこの人物の心理をこれほど詳しく知っているのかと読者に幻滅させる危険性もある」というものである。そして、「このような危険から救い、加えて真实性を保たせ、読者を知らぬ間に暗示にかけることができるのが日記というスタイルである」と書く。⁽⁷⁾

「日記文学」は、「勞生日記」掲載と九月の『日記九種』刊行のための前振りであり、『日記九種』の真实性を担保する仕掛けであつたといえよう。魯迅はこの「日記文学」を取り上げ「スタイルはそう重要ではない」と書いた。このことはこれまで、「真实性」と「事実性」をめぐる両者の認識の相違として論じられてきた。⁽⁸⁾ここでは、むしろ郁がスタイルへのこだわりを見せていることに注目したい。郁は「何を書くか」と同時に「どう書くか」にこだわつた作家である。⁽⁹⁾

郁は『日記九種』後叙⁽¹⁰⁾で、日記を公表する行為について「文人が日記や書簡を売るに至るのは、行き所のない末の行為だ。私がかこまで至ってしまったのも、生来の愚かさのゆえである〔中略〕諸君には私の轍を踏まないことを願う」と自嘲気味に書く。

このような郁の表白を受けて、先行研究は郁の日記につ

いて「単なる売文であり、文学的価値はない」とする見方が少なくなかった。鈴木正夫は一九二〇年代後半の郁の文学活動について、「この時代の作家として己れはかくあるべしとして意図したものと、生計を維持するためにやむを得ず手を染めたものとの二種類に色分けされる」として、『日記九種』を後者に分類する。また、「後叙」にみられる自嘲について「当時の彼の偽らぬ心境と受けとつてよいと思う」と書いている。¹⁰⁾

平井博も「後叙」の自嘲に拠りつつ、「この『日記九種』に特別の意味をもたせることはできない」「作品を生むあいまの日記、紀行文、小品文に、文学者の売文生活を支えるというごく普通の意味あい以上のもを負わせるのは無理かもしれない」とする。ただし平井は、『日記九種』に続く郁の文筆活動と合わせて考える時、「そこに一つの彼なりの文学的信念のようなものが浮かびあがってくることもまた否定できない」とも指摘している。¹¹⁾

確かに「後叙」の自嘲は、日記を公表することが世間からどう見られるかを意識したうえでの悔恨を込めた自己言及と受けとれる。だが同時に、そのような愚かな自分を読者の前にさらけ出してみせる、郁なりの自己演出の意識も働いていたのではないだろうか。

鈴木正夫は、郁が日記を発表するに際し、元々出版を意図せず書いた日記に手を加え、いわばある種の「創作」として体裁を整えた可能性を指摘している。¹²⁾

郁は一九三五年六月に書いた雑文「再談日記」で、「日本で学んでいた頃は、もちろん断続的に数多くの日記を書いた」「帰国後は雑誌の編集をしたり教鞭を取ったりして、その間も日記を書く習慣は絶やさずにいた」などと語り、以前から日記をつける習慣があったことを明かしている。また例えば、「広東に南下したり、北京に北上したりして、生活に変化が起きてからは、日記を書く量はようやく少し増えた。だが記録する際は、もちろんそれらのつまらない日常の瑣事を公衆の面前に公開する意識はなかった」とも書いている。¹³⁾『日記九種』はこのような日常の記録としての日記を整理して公開したものであるといえる。これが読者を意識して手を加えたものであることは、たとえば一部の人名を「某」などと伏せて書き、創造社同人や作家など公の性格をもった人の名は公開するといった書き分けからもうかがうことができる。『日記九種』は、当時の郁の思考と行動の記録であると同時に、必ずしもありのままの生活と行動をすべて記録したのではなく、公開するか否かの選別を行った結果としての「作品」である。その判断には、郁

自身の自己演出の意識が多分に作用しているだろう。記録に手を加えて作品となった日記に描かれるのは、郁が公表することに同意した「作家・郁達夫」のイメージであり、物語である。「後叙」の自嘲には、こうした自己イメージを踏まえた、郁なりのある種のポーズがあるのではないだろうか。

近年は郁の創作活動における積極的な意味を『日記九種』に見いだそうとする動きがある。大東和重は『日記九種』は、王映霞という新しい伴侶を得て、死滅していたかと思われた魂が蘇生し、創作者としての自信も復活する、その過程の記録である。描かれたのは、恋愛を契機に、本来的な自我を発見し実現していく、その歓喜と祝福の瞬間である」として、九篇のうち特に「新生日記」と大正期日本の自伝的恋愛小説のかかわりについて詳しく論じている。^⑤

『日記九種』と同じ頃に書かれた郁の文章からは、郁自身が王との恋愛に大きな意味を見いだしていたことが読み取れる。郁は中国近代作家としては最も早く存命中に全集を出した作家であり、その第一巻にあたる『寒灰集』の題辞で、次のように書いている。

全集の第一巻、その名を寒灰という。寒灰が再び燃

えるには、息を吹きかける力を借りねばならぬ。その大きな力の源は、おそらくはわが友王映霞にあるだろう。このつまらぬ小さな書物が永遠に伝わりとするならば、わが友映霞の名も、これとともに伝えていこう。^⑥

郁が恋愛を契機に「本来的な自我を発見」し、「創作者としての自信」を取り戻したとすれば、その「本来的な自我」とは、また、郁が取り戻したと考えられる「創作者」としての自分の姿とは、一体どのようなものだったのか。先行研究で位置づけられるように、郁が作家としての転換を果たす契機が二七年の恋愛にあり、郁自身が「寒灰が再び燃える力の源」と呼ぶ王との物語が『日記九種』に表されているとすれば、その契機と変化は九篇の日記にどのように描かれているのだろうか。また、作家としての郁の「再生」は、郁自身が書いた通り、本当に二七年を境として果たされていたのだろうか。

二 『日記九種』に描かれる「恋愛」

日記各篇の期間と内容は以下の通りである。

「勞生日記」 一九二六年一月三〇日 中山大学での日々と辭職の決意。白薇との交流。創造社出版部の青年たちと衝突。

「病閑日記」 同年一月一〜一四日 辭職を決意してから広州出立まで。白との交情。

「村居日記」 一九二七年一月一〜三十一日 上海での彷徨、王との出会い。創造社出版部の整理で度重なる不快感。

「窮冬日記」 同年二月一〜一六日 恋愛の苦悩と挫折。

「新生日記」 同年二月一七日〜四月二日 王との恋愛の苦悩と成就。

「閑情日記」 同年四月二〜三〇日 北京の妻と王とのことで兄から非難される。戦火の上海を離れ、杭州の王の実家を訪れる。

「五月日記」 同年五月一〜三十一日 体調を崩して入院。王と安定した関係。月末、共に杭州へ向かう。

「客杭日記」 同年六月一〜二四日 杭州で療養し、王と婚約披露宴を開く。

「厭炎日記」 同年六月二五日〜七月三十一日 上海へ出る。孫・王との関係に悩む。王と外国へ移住する考え。

ここで、『日記九種』の記述の一部を見てみよう。以下は、郁が王と知り合って間もない一月二〇日、上海で王が滞在する孫百剛夫妻の家を訪ねた際の記述である。

王女史は一人ベッドで声を殺して泣いている。どうしたことかと思つて尋ねてみると、孫夫人が、僕と別れるのを辛がっているのだというので、ベッドのそばへ行き、蒲団に手をさし入れて彼女の手を握り、なだめながらメモを書いて手渡してやった。すると、四、五分して彼女は泣きやんで、笑顔を見せてくれた。僕のために泣いてくれたのだと思うとうれしくなり、二、三時間前のあの憂鬱もけし飛んでしまった。「中略」ああ、楽しくてたまらない。今度の恋愛が成功してくれたらと心から思う。「中略」彼女との恋愛が成功した後のことが次々と頭に浮かぶ。ああ、神よ、僕は僕の王女史を失わずにすむなら、僕のあの愛しい王女史を失わずにすむなら、すべてを犠牲にしても悔いがない。

郁は王の愛を獲得するために熱を上げる。二人の関係は次第に進展し、王は郁の愛情を受け入れていく。次に引く

のは、郁が恋愛の歓喜と苦悶のさなかにあつた日々を綴つた「新生日記」の一部、三月二十五日の記述である。

映霞の手紙も来ていて、尚賢坊に会いに来るようにとのことだったのでただちに駆けつけ、午後五時まで彼女と向かい合っていたが、何もいい出せなかつた。彼女は来週の月曜に会つてくれるといい、手紙を出せるように住所を教えてくれた。どうあろうと、彼女は僕の愛を受け入れてくれたのだ。僕はそう思う。今後は今度の Perfect Love (ママ) を完成すべく努力しよう。彼女を裏切らぬため、損害をあたえないために。⁽¹⁸⁾

二人の関係は落ち着いたかに見えたが、ある日王が郁の寝室で日記を発見し、憤慨して郁を痛罵する手紙を書いて立ち去る事件が起こる。次に引くのは、その当日、三月一日の記述である。郁は王への返信を二通書いた後、雨の中、王が寄宿する坤範女子中学を訪ねる。

土左衛門のようにぐしょ濡れになってようやく坤範へたどり着くと彼女はいいない。気が気ではなく尚賢坊へ回つてみたが、もちろんいるはずがない。(中略)

ただ一人風雨の街を歩きながら、思い切り声を上げて泣いてみたかつた。恋愛がこんなにも苦しいものなら、いつそ死んでも二度と彼女とは付き合いたくない。ああ、天はどうして僕に嫉妬するのか。どうしてこんな目に会わせるのか。僕は恨む。ほんとうに。⁽¹⁹⁾

翌日再び王を訪ね、改めて弁明をする機会を得る。

それにしても何と運がよかつたことか。彼女が出て来て立ち話をしてくれ、明日創造社を訪ねて来てくれると約束してくれたので、恩赦に会つた死刑囚のように、胸をはずませて帰つた。⁽²⁰⁾

十三日、王が上海創造社出版部に郁を訪ねる。

映霞と周家へ行く。(中略) 彼女が帰るといい出したので、強引にハイヤーに乗せ、六三花園へ行く。そこからもどつて北四川路の喫茶店にはいり、一時間ばかり事をわけて話し、どうやら納得してもらつた。⁽²¹⁾

このように『日記九種』には、王への激しい恋愛感情とそれに振り回される自分自身の姿が綿々と書き綴られる。郁にとって王の考えは時としてうかがい知ることができず、そのために悩み、ひとたび彼女の許しを得られると「死刑囚が恩赦に会ったような」高揚した気分になる。ここに描かれるのはもっぱら郁の心理であり、王は「主人公」たる郁の恋愛の相手という重要な存在でありながら、その心理はほとんど明らかになることはない。王の言葉は郁の言葉としてしか語られず、すべては郁の視線を通してしか描かれない。『日記九種』に描かれるのは恋愛そのものではなく、恋情に溺れる郁自身の姿なのである。このことは、王映霞の自伝を対照して読むと明らかである。

郁がベッドで泣く王映霞を慰め、「別れが辛いと自分のために泣き、笑顔をみせてくれた」と有頂天になった一件について、王は、実際には周囲から郁との関係を取り沙汰されることを苦痛に感じて泣いていたのであり、笑つたのは郁のメモがまるで「子供をあやすよう」であったからだと書いている。王の真実は、孫夫人のその場しのぎの説明を真に受けて懸命に自分を慰めようとする単純な郁の姿とその状況に、ある種のおかしみを感じたために笑つたのであり、それは両者の心理的な接近でこそあれ、郁が考えた

ような恋の始まりではなかった。

また、郁の日記に憤慨して帰郷した際の心理は、怒りと同時に恥ずかしさであり、作家と交際することの恐ろしさを感じ、他人から笑いのものならぬよう郁との間に距離を置くことを決意したという。

『王映霞自伝』は王が晩年に書いたものであり、その記述は、当時の実際の心境をそのまま綴つたものとはいえないかもしれない。だが心理描写は細やかで具体的であり、そこには、関係の進展に伴って起こる周囲との軋轢に惧れを抱きながら、郁の内面にある寂しさを抱えた「沈淪」の少年に強く惹かれ、郁との恋愛に否応なく巻き込まれていく血の通つた人間の姿がある。それは、『日記九種』に見られるいわば人形のような王映霞像とはまったく異なっている。

郁の小説に登場する女性は、主人公の「告白」を一方的に受け取るだけで、自らの意志が全く描かれず、「言葉を奪われている」のが大きな特徴の一つである。『日記九種』も同様に、女性との「関係」は描かれず、女性から一方的に「救済」されると思ひこむ郁自身に焦点が当てられている。『日記九種』は、恋愛そのものよりも、恋愛の渦中にある人間の自意識を描いた作品なのである。

郁の初期の小説「沈淪」は、「性そのものではなく性欲を描いた」とされる。澤田瑞穂は、「沈淪」は「性に対する青年の痛苦の真実なる叫びであって遊戯ではなかった。これが郁達夫の近代性であって、『肉蒲団』風な誤れる情痴の風流と同一視することの出来ないのは勿論である」と指摘している。⁽²⁶⁾ 創造社同人の成仿吾は「沈淪」を「愛を求めぬ心」を描いた作品だと分析する。⁽²⁷⁾ 大東和重は、「始まりも終わりもない文学青年の〈自意識〉の物語」と評する。⁽²⁸⁾ 人間の自意識を描くことが郁の小説の新しさであったとすれば、『日記九種』にみられる、恋愛に悩む人間の自意識を描く手法は、「沈淪」からほとんど変化していないのではないだろうか。

三 「寒灰の再燃」と『日記九種』

郁が恋愛を契機に作家として再生を果したことについて、各日記の末尾と次の日記の内容を比較してみたい。

郁は各篇の末尾で、決まってその月の生活を反省し、翌月からまっとうな人間として正しい生活をする決意を綴る。

「勞生日記」

一九二六年一月三〇日 明日からは失業するのだから、著作、翻訳に精を出そう。残る半生の事業は、一に今後の意志如何にかかっている。

「病閑日記」

一九二六年一月二日 今日もまただめだ。何をやる気も起らない。

同月一四日 今度上海へ行ったら酒と煙草をやめ、奮励努力しよう。「中略」これからは創作に専念するだけだ。

「村居日記」

一九二七年一月六日 法大馬路の酒場で小酌、帰るなり床にはいる。

同月一〇日 酒場で華林としたたかに飲み、フランス租界の友人のところへ行く。

同月三二日 明日からは新しい日記がはじまる。僕は僕の生活も日記と同様に生まれ変わり、新しい紀元を開くことを心から望んでいる。

「窮冬日記」

二月五日 今後は心機一転、努力してこれらの女の悪魔を追っ払おう。「中略」僕は今、文字どおり人

生に行きづまってしまった。ヨーロッパへ行けばまた何とかなるかもしれない。

同月一六日 ほんとうの禁酒は今日からだ。この次もしまた之音に会うようなことがあったら、彼女は僕の禁酒禁煙の意志力に感歎するにちがいない。

〔新生日記〕

二月二六日 彼女たちと麻雀をやり、酒を飲み、しゃべり、午前三時、空が白むころになって、やっと以前王女史が使っていたベッドで寝る。

四月二日 朝八時に目が醒めたが、また下らぬ心がおこり、この一カ月来の発奮努力の決意も完全にひっくりかえってしまった。今日はまた〔中略〕

僕の平生の弱点をくりかえしてやろう。そして明日から新しい生活をはじめなのだ。

〔閑情日記〕

四月二日 食後宿に帰り、また麻雀で徹夜。

同月三〇日 明日は五月一日、世界の労働者の記念日だ。

明日からは僕の精神も肉体も、きつと一段とたくましくなり、一段と進歩するにちがいない。

〔五月日記〕

五月一日 過ぎ去ったことを傷み歎くことはやめよう。

たいせつなのは将来だ。ことに現在だ。

同月三二日 五月も今日で終わりである。今月は何一つできず、大病をしただけだった。

〔客杭日記〕

六月一日 〔杭州に来て〕すでに五日になってしまった。

まるで夢の中のようにあつという間だった。〔中略〕世間のことはきれいさっぱり忘れ去って、この数日まるで極楽のような暮らしをしてきた。

同月二四日 北京時分の学生を訪ねてみると、彼らはみなすでに杭州でしかるべき地位に着いている。しばらく話すうち、つくづく自分が年をとったと思った。〔中略〕青空を仰ぎ、天下は広大だが自分はどこへ行ったらいいのだと、しみじみ思う。

〔厭炎日記〕

七月二日 午後は退屈を持ってあまして何か書いてみようかと思つたがいつこうに書けず、しかたなしに

西洋の作品を手当たりしだいに読んでみた。〔中略〕夜は上新旅社へ数名の同郷人を訪ね、夜中まで麻雀をやつて帰る。床にはいったときには

ほんとうに疲れきっていた。

同月三〇日 帰る途みち、人力車の上で生きている不安と
 いったものを感じた。原因はどうも北京の荃君
 から来た脅迫状にあるらしい。万が一、二進も
 三進も行かなかつたら、映霞とともに海に身を
 投げて死にたいものだ。

同月三十一日 僕は未来に、中国に、創造社に、いい知れぬ
 深い愁いを感じている。今はただ花がとこしな
 えに凋むことなく、月がとこしなえに欠けるこ
 とがなく、また世の人びとが思慮に富んで、僕
 が自ら巽に飛びこんだような愚を二度と犯さな
 いように望むばかりである。⁽²⁸⁾

このように、各篇の終わりでは、それまでの退廃的な生
 活を悔い改め、翌月からは新しい生活を始めようと固く決
 心するが、数日するとその決意は霧消し、相変わらずの自
 堕落な生活を送っている。この生活傾向は、恋愛が成就し
 た後もさほど変わっていない。創作は進まず、無為に歳月
 を費やしてきた人生に茫漠とした悲哀を感じ、かといって
 発奮して生活を一新するでもない。最後の「厭炎日記」末
 尾では、王との関係について北京の妻から脅迫してみた手紙

を受け取って悩み、現実からの逃避を図る愚かな自分への
 嘲笑が綴られる。先に述べたように、ここには郁特有の自
 己演出の要素もあると考えられるが、自身の退廃を嫌悪し、
 悔い改めるもなお本能の欲求に負けて同じ行為を繰り返す
 姿は、罪の意識にさいなまれながら自慰行為を止められな
 い「沈淪」の主人公を彷彿とさせる。⁽²⁹⁾

『日記九種』に描かれるのは、「再生」という言葉から連
 想されるような力強く輝かしい再出発や、愛の獲得によつ
 て作家として新たな境地に到達する作家の姿などではな
 く、恋愛によつて新たな苦しみを抱え込み、更なる苦悩へ
 と落ち込んでいく人間の姿である。郁が恋愛によつて再生
 を果たしたとすれば、その「再生」とは、かつて疑いを抱
 いた自らの文学に対する自信を取り戻すことであり、愚か
 で不甲斐ない自分の姿を読者の前にさらけ出してみせる、
 いわば自意識の文学の再演であったように思われる。

四 邦訳にみる作家イメージ

先に述べたように、『日記九種』に描かれるのは、郁が
 公表することに同意した「作家・郁達夫」のイメージであ
 る。それは、郁が「五六年来創作生活的回顧」で自ら語つ

た「恋愛によって自己再生を果たしたロマンチックな作家・郁達夫」の像であるだろう。この点について、立間祥介による邦訳を例に考えてみたい。

立間祥介訳『日記九種』は駒田信二・松枝茂夫訳『現代中国文学六 郁達夫・曹禺』に収録され、一九七一年に河出書房新社より出版された。『日記九種』唯一の和訳である。訳文は一部を割愛したほか、原文の日付の下に付されている旧暦の日付は、月初を除いて省いている。訳出された箇所については、必ずしもすべての訳が原文通りというわけではなく、複数の文章をまとめて意訳した部分も見られるが、人名や書籍・作品名などが丹念に調査され、注釈も詳しく、貴重な訳業といえよう。

調査によると、立間訳では、特に郁の広州時代を綴った「劣生日記」のうち複数部分を訳出していない。割愛されたのは、日常の瑣事や読書記録の一部を除いては、主に郁の最初の妻である孫荃と郁の関わりに関する部分である。例えば、一九二六年一月三日の「もうここに来て十二、三日もたつてしまった。こんなところに来なければよかったのだ。こんな未開野蠻の地になんか」の後、原文には「北京の妻は数日前に手紙をよこして、大変悲しんでいる。僕もそれを読んで彼女のために涙をこぼさずにはい

られなかった。今日また二通書いて彼女を慰めてやった」との記述があるが、立間訳では削られている。⁽³⁰⁾

翌四日には大学から月給を受け取り、その中から一六〇元を北京の妻に送る考えを綴った後、次のように続ける。「ああ！ 貧しい夫婦が一千里を隔てて想い合っている。僕と彼女は一体いつになれば共に暮らすことができるのだろうか」だが、この文章も立間訳では割愛されている。⁽³¹⁾

また同月七〜一〇日はすべて訳出されていないが、一〇日の原文には「帰ってきて夕食を食べ、ビールを一本飲み、北京の荃君と子どもを思い出してまたひとしきり泣いた。夜入浴したらどうやら風邪を引いたようだったが、北京への手紙を書いた」とある。⁽³²⁾

このように、「劣生日記」の原文には、しばしば北京にいる妻子を思い、妻と頻繁に手紙のやりとりをし、また妻からの手紙が届かないことに気を揉む日々が記録されている。郁は広州時代、運配される給与の多くを北京へ送金し、燕の巣を買って送るなどの心遣いをしている。先行研究で指摘されるように、郁の孫への感情は、旧式の婚姻制度に抑圧される運命共同体としての同情心があるだろうが、同時に原文からは、孫からの便りが届かなければ精神的に不安定になるような、ある種の依存的関係すらうかがうこと

ができる。⁽³⁾

立間訳では、孫の登場箇所が最小限に抑えられているほか、孫以外の身近な学生や他の女性との会食、交情も訳出されていない。これに対して、王との恋愛を綴った「新生日記」は、削除することなく全体を訳している。その理由は不明だが、郁が自ら示してみせた「恋愛によって再生を果たした作家像」に左右されるところがあったのだろうか。また、訳出する部分を取捨選択するという操作によって、郁が王を求める行為のもつ多層的な意味が削ぎ落され、結果として王との出会いが、ある種の運命的な意味を持ったものとして、邦訳の側からも強化された可能性を指摘できる。

五 小結と課題―『日記九種』のその後

郁は、一九二四年に自らの文学に疑念を持ち、生活と創作に苦しんだ時期を経て『日記九種』の発表に至った。そこに描かれたのは、高らかな人生讃歌や恋愛の喜びなどではなく、再生への決意と自堕落な快楽への欲求の間で右往左往する人間の姿である。郁が恋愛によって再生を果たしたとするならば、その再生とは、このような愚かな自分をさらけ出す「自意識の文学」に対する自信を取り戻すとい

うことであり、『日記九種』はいわば従来の郁の文学スタイルへの回帰であるといえるだろう。

恋愛による「寒灰の再燃」を宣言した郁のその後の執筆活動は、言葉通りのものだったのだろうか。次に、実際の郁の小説の執筆数の変化と、その特徴を確認したい。

郁は二一―二三年の前期創造社時代、極めて精力的に小説を書いており、特に二三年には一二篇もの作品を書いている。

前期創造社を離れた二四年以降の三年間には計八篇しか書いておらず、特に二五年と二六年には激減し、それぞれ二篇のみである。

転換期といわれる二七年以降を見ると、二七年は六篇と、それまでよりやや多いが、二八年には再び減少して二篇である。その後、二九年二篇、三〇年四篇（このうち一篇は未完）、三一年三篇である。総じて、二七年以降はさほど回復しているとは言いがたい。

後期において郁の小説の創作が増えるのは三二年で、六篇書いている。しかし翌三三年には一篇に減り、三四年は零篇、三五年は二篇のみで、それ以降は小説を書いていない。三五年に書いた二篇の小説が、結果として郁の最後の小説となった。

小説を含めた執筆数全体を見ると、二五年が一三篇、二六年が二一篇であるのに対して、二七年が五六篇、二八年が四四篇と、それ以前に比べて激増している。ただし内容面では二七年は雑文が二四篇、二八年は翻訳が一九篇（うち連載一二篇）と、それぞれ創作以外の活動が大部分を占めている。

後期の創作不振については、郁の執筆意欲だけにとどまらない様々な要因が考えられるが、郁の小説家としての再生は、必ずしも恋愛の成就によって直ちに果たされたわけではなく、また郁自身が二七年に宣言したような、華々しくドラマチックなものではなかったことは指摘できよう。

ここで、執筆活動の詳細をさらにみていくと、二七年の雑文では、「日婦」の筆名で広東政府の腐敗を批判した「廣州事情」（『洪水』第三卷第二五期、一月一六日）や「無産階級専政和無産階級の文学」（『洪水』第三卷第二六期、二月一日）、山口慎一への公開書簡「公開状答日本山口君」（『洪水』第三卷第三〇期、四月一日）、自ら和訳した「訴諸日本無産階級文芸界同志」（『文藝戦線』第四卷第六号、六月一日）など、左翼的な文章が目立つ。翌二八年の翻訳の中では、米プロレタリア作家アプトン・シンクレア『拝金芸術』の翻訳連載が特に目を引く。⁽²⁴⁾

これらの社会主義的色彩を帯びた雑文が『日記九種』とほぼ同時期に準備されたものであることを考えると、『日記九種』に綴られた郁の生活は、やはり「作品」として用意された一側面にしか過ぎなかったように思われる。だが、『日記九種』に社会的な視線がまったく反映されていないわけではない。「労生日記」では大学へ頻繁に新聞を読みに行き、政情への憂慮を吐露している。「新生日記」や「閑情日記」では、王との恋愛に一喜一憂する一方で、労働者のゼネストや国民革命軍の発砲・虐殺が頻発し、戦火にある上海の様相を描いている。こうした描写に注意を払って読むとき、『日記九種』は単なる恋愛物語にはとどまらない、社会的な様相を帯びて立ち現れる。ここに、郁がこの時期に目指していた文学の方向性を読み取ることもできよう。これが後期の創作活動にどのようなつながっていくのかは、今後の課題として考えていきたい。

注

- (1) 「一封信」『東方雜誌』半月刊第二卷第二号、一九二四年一月二五日。引用は『郁達夫全集』第三卷、浙江大学出版社、二〇〇七年、第七六頁。以下、引用は特記しない限り同書による。
- 我觉得艺术中间，不使人怀着恶感，对之能直接得到一种快乐的。

只有几张伟大的绘画，和几段奔放的音乐，除此之外，如诗，文，小说，戏剧，和其他的一切艺术作品，都觉得肉麻得很。／我近来对北京的朋友，新订了一个规约，请他们见面时绝对不要讲关于文学上的话，对于我自家的几篇无聊的作品，更请求他们不要提起。因为一提起来，我自家更羞惭得甯身无地，我的苦闷，也要增加。

(2) 李麗君は、教員時代の郁の生活について詳細に調査している。「郁達夫の原像―異文化・時代・社会との葛藤」花書院、二〇一六年、第二章。

(3) 平井博はこの時期の郁の状況について、「表現そのものを手はなしかねない危機」と形容している。「郁達夫―その文学的模式」上『無名』第三号、一九八三年一月、第二九頁。

(4) 例えば、黎錦明は一九二一―一九二八年の郁の創作活動を三期に区分し、第一期を『沈淪』産生の時期、第二期を帰国（北京赴任までの「自我表顕の時期」、第三期を一九二七年以降の「過去」的蛻変時期）としている。錦明「達夫の三時期」『一般』第三卷第一期、一九二七年九月五日。本稿では陳子善、王自立編『郁達夫研究資料』海外版（三聯書店香港分店／花城出版社、一九八六年）に拠った。

(5) 二七年八月三一日執筆。『文学週報』第五卷第一・二二号合刊、一九二七年一〇月。引用は同注一前掲書、第一〇卷、第三〇九頁。

现在我只想把自己的，如何的和小说发生关系，，如何的动笔起来，又，对于创作，有如何的一种成见，等等，来乱谈一下。

(6) 同注一前掲書、第一〇卷、第三二二頁。

在这一年中，感到了许多幻灭，引起了许多疑心，我以为以后的创作力将永久地消失了。后来回到上海来小住，闲时也从前住过的地方去走走，一种怀旧之情，落魄之感，重新将我的创作欲唤起，一直到现在止，虽则这中间，也曾南去广州，北返北京，行色匆匆，不曾坐下来做过伟大的东西，但自家想想，今后仿佛还能够奋斗，还能够重新回复一九二三年当时的元气的样子。

(7) 「日記文学」一九二七年六月一四日作。『洪水』半月刊第三卷第三二期、一九二七年五月一日。同号は刊行遅延のため、奥付の日付が實際よりも早い。引用は同注一前掲書、第一〇卷、第二八七頁。

散文作品里头，最便当的一种体裁，是日记体，其次是书简体。／这一种自叙传，若以第三人称来写出，则时常有不自觉的误称第一人称的地方，〔中略〕并且缕缕直叙这第三人称的主人公的心理状态的时候，读者若仔细一想，何以这一个人的心理状态，会被作者晓得得这样精细？那么一种幻灭之感，使文学的真实性消失的感觉，就要暴露出来，却是文学上的一个绝大的危险。／足以救这一种危险，并且可以使真实性确立，使读者于不知不觉的中间受催眠暗示的，是日记的体裁。

(8) 鲁迅「怎麼写——夜記二」『莽原』半月刊第一八・一九期合併号、一九二七年一〇月一〇日。「日記文学」をめぐる議論については、同注三前掲書など。

(9) 郁における叙述方法の意識については、拙稿「郁達夫『蕙羅行』をめぐる初歩的考察——その表現と作家イメージ」(『神話と詩』第二二号、日本聞一多学会、二〇一四年三月)を参照のこと。

(10) 「『日記九種』後叙」一九二七年八月一四日作。『北新週刊』第四五、四六期合刊、一九二七年九月一日。引用は同注一前掲書、第一〇卷、第三〇四頁。

文人妻到日記和书函、是走到末路的末路时的行为、我的所以到此地步、也是由于我自己的生性愚魯、请大家不再要去踏我的覆轍。

(11) 鈴木正夫「郁達夫——悲劇の時代作家」『研文出版、一九九四年、第六八頁。

(12) 同注三前掲書、第四四、四五、四八頁。

(13) 同注一一前掲書、第六七、六八頁。

(14) 同注一前掲書、第一一卷、第二一六頁。

在日本读书的时候、当然也断断续续的记下了许多的日记／回国之后、做了些编杂志和教书的事情、中间虽也不曾断过日记的习惯／自从南下广东、北回北京、生活上起了变化之后、日记方才记得多了一点；但当记载的时候、当然是没有把这些无聊的

日常琐事、公之于大众之前的意识的。

(15) 大東和重「郁達夫と大正文学——自己表現から自己実現の時代へ」東京大学出版会、二〇二二年、第一七八頁。

(16) 「寒灰集」題辭「達夫全集」第一卷、上海創造社出版部、一九二七年六月。引用は『郁達夫文集』第七卷、花城出版社／生活・讀書・新知三聯書店香港分店、一九八三年、第一六九頁。

全集的第一卷、名之曰寒灰。寒灰的复燃、要借吹嘘的大力。这大力的出处、大约是在我的朋友王映霞的身上。假使这样无聊的一本小集、也可以传之久远；那么让我的朋友映霞之名、也和它一道的传下去吧！

(17) 立間祥介訳「日記九種」(抄) 駒田信二・松枝茂夫訳『現代中国文学六 郁達夫・曹禺』河出書房新社、一九七一年、第一四七、一四八頁。以下、原文は省略する。

(18) 同注一七前掲書、第一六七頁。

(19) 同注一七前掲書、第一七五頁。

(20) 同注一七前掲書、第一七六頁。

(21) 同注一七前掲書、第一七六頁。

(22) 『王映霞自伝』黄山書社、二〇〇八年三月、第三二頁。初版は台湾伝記文学出版社、一九九〇年一〇月。

自从我认识郁后、时时感觉到人们在议论我、我觉得自己没做什么坏事、大家为什么要在背后讲我？(中略)一天我实在熬不

住了，白天也不肯起来，躲在被子里痛哭，大家都劝我别这样。

正在这时，郁达夫来了，〔中略〕孙太太搪塞着说……因为她要回

杭州去，但又不愿离开我们。郁听了以后，走过来拉着我的手说：

‘别哭了。’见我不理他，他又写了张纸条塞给我，我一看，上面

写的全是哄小孩的话，挺逗，不觉笑了起来。

(23) 同注二二前掲書、第四九頁。

偶然间翻看了他近日写的好几页日记，心中有些恼火，同时有些怕羞。我开始感到和一个作家交往，有些胆寒，回到杭州以后，

我便狠狠地下决心要和他疏远，免得日后闹出许多笑话来。

(24) 井上薰「郁達夫作品にみる『性 (sexuality)』の言説—その『告白』という儀式—」『野草』第六九号、二〇〇二年十二月。

(25) 澤田瑞穂「中国の文学」学徒援護会、一九四八年、第三四—三五頁。

(26) 成仿吾「通信」『創造』季刊第一卷第三号、一九二二年一〇月。

達夫的「沉淪」，大家都說是描寫靈肉的衝突。我卻不以為然若

說是靈肉的衝突，未免太膚淺了。我說他所描寫的，是「求愛的

心 Liebe bedürftiges Herz」。

(27) 同注一五前掲書、第九一頁。

(28) 同注一七前掲書、頁番号は省略する。

(29) 李麗君は「日記九種」における郁の退廃的生活について指摘している。同注二二前掲書、第四章。

(30) 同注一七前掲書、第一二五頁；同注一前掲書、第五卷、第

三六頁。

北京的女人前几天有信来，悲伤得很，我看了也不能不为她落泪，

今天又作了两封信去安慰她去了。

(31) 同注一七前掲書、第一二六頁；同注一前掲書、第五卷、第

三六—三七頁。

唉！貧賤夫妻，相思千里，我和她究竟不识要哪一年哪一日才能合住在这一块儿。

(32) 同注一七前掲書、第一二六頁；同注一前掲書、第五卷、第

三九頁。

回来吃晚饭，喝了一瓶啤酒，想起北京的荃君和小孩，又哭了

一阵。晚上入浴，好像伤了风，作北京的家信。

(33) 高橋みつるは、郁と孫の關係について「悲しみや痛みを共有し、

慰め合える伴侶ではあつたはず」「二人の間を結ぶ絆、それはいわば運命共同体的な連帯感といったもの」と指摘している。「郁

達夫と孫荃・王映霞—家・家族・愛の視点から—」上「愛知教

育大学研究報告」(人文・社会科学編) 五五、二〇〇六年三月、

第七頁。

(34) 郁によるシンクレア翻訳については、大東和重「郁達夫と日本の初期プロレタリア文学—シンクレア『拜金芸術』翻訳を通して—」『文学・語学』第二〇二号、全国大学国語国文学会、

二〇二二年三月）に詳しい。

〔キーワード〕 郁達夫、『日記九種』、作風転換、自意識の文学、作家
イメージ